

花傳書

特別
子12
3606
1



特
十12
3606
1



夫申樂延年のこゝろわきも源を尋ねりこ此
國より一まるとこらひ地祇不代あまて侍侍
祇乃内時よ天乃岩戸の祇遊志給ひ一時八百
万の祇うちたらしまり原よあつまりたまひひ
曲を流るりけりめあけて岩戸のまへよて
かくとりし事哉そく給ふも祇樂成然
して天照皇太祇宮岩戸をお給ひ目本あまき
く小なるうりけりけりこよは曲繋也ささ
目お交曲あまきいとても風を流るるま
いんや代奄くくもねまは風をまたなる
及ひくくかくも菱鏡に役者あまきさ
流人もてあうふ事なりけり一追代あまきこの

下
横山家蔵

役志と略しなむ曲乃志をうとむる人のふと
りふを能り初也其みありをふりぬるよ
浄門より秦川勝は信て天下安全のたぬ又の
万人伎樂の爲よ世よりき曲を所より人と
あまーりの川橋承てそとき三十三番乃能を
能りそーむる也能は今のやうなる能乃心も
多く和安とよと打とや一て一曲一うかて
一座乃遊ひますてよてあり所を中比天下よ
竹田よりとりとて美人曲の名人あり所より
け曲と母真志そ時は美人六十六番乃のふを
能り多く此曲をうへる也よよかよ能と
中い是也竹田い今春太夫なむらとりりい高

あ乃源なりさよ進い祢代のまあひをやーい
かほく男のようかひをふせうひい祢安を
表きり能は祢すよのふをせると云もは役也
何ころまほけ祈禱すりも祢もうけ能ふとは
右乃子細なれば藝とたーあまん人の佛祢の
所めくもよりなるううひあー能あくい
あふとて心あきさつのを志列のめまても
び國のよーまふよりこれるを志んや
一日乃能は佛法世は祢代のもーまり人君乃
りーまわめいとのも獲まてとくをあー
んくちうく言衆をやーき仕舞子あーい
是なまてりあるらあきいもーき民まても

のふを見たらん人いうわ無常因果むくわ乃
る積義理仁義をすひまごまなる事なすり
あまとして善よりこむりさらんや然候時いば
藝よ心をわく法人に現世いば生よかまひば
生い仏果よいこるすうこひあ一然いある
まもむり一とのる世智のありまも神祇釋教
意無常多くさまくを所く一むり一より積
をくあのをあくを清くより紀貫之よ伝きて
撰すくも古今集候所くく世終ふ則古今とは
いり一へととりいこわくまも神代よりこれ
くこのみ積多く世居る乃る理とあく一人
るよあくくん為也志くまもむるも万民乃

見くよ入事なわく一くくひま一
くくくいあ一先おも一ろき曲をま一いさきも
いや一きも是をもちい終ふよよりさあく
るよつくるすくを一仏法も念の所きあい
佛なわ終もくもあまをや一まてもあまは藝
あらんときいすり人も見る人も依念いあ
所も候くくくんことも人乃ふくきくも思ひ
おさくたき一くんなることくあいさあく
佛なわ如く威徳わきき曲をま一いばるをく
あまん人いいうふもくわめよんたを一夫
るくしてきいこま一
一樂を入なして物乃まめもかをこるるとくあい

人君の胎内はやと海かこちなり

一まくをうちあきいけり風情是人君乃生海く
くこちなり

一翳といひの釋きお世の仏法をひろめたまふ
心也翳乃うこひ多難尼と祓るをもつて是を
けりり太夫笛大小太鼓をいふ神不福は表
地水火風空をいふと太夫をいふ空の字り
たと人笛をいふ風の字りこと太夫をいふ火乃
字りたと人太鼓をいふ此字りたと人たいこを
地此字りたと人太夫を空はたと人空の天
沈陽陰不神不福仏法のうまうこ也これ理り
釋きもの人うこきと後清ふ清縁は

空の字いちこみりーらよたと人こわ

とくもとうまひつふもいたまは

一終くものす一日は六番なり子初は初は國を
六十六はまらるる役行者の基菩薩國にけり
のこわき給ひ人い六十六をこまわらる
ゆへよ人の心も國こふりりやまなまをまわ
以下まを別はわらるる右乃ありりりめ此
子初也これ國も六十六のふらうまるあも
六十六番をこまを數を表して一日は一番は
さこむり也

一一番は祝言をまらるる神能はさこまわりこわ
祝言めくあういあよのふもてもあまはあ

へき倭を遣はす神終よさだめなるい子孫あり
日本に神國なり神代よりいつてこころ國を遣は
今仁王の神代よ至はまて我朝の守護神たり
かろゆへよも目新禱として神とく日らん言
と家とりよいよもして一書よ神終なり
一二書よ備後をするも標は國の弓矢をもつて
あくまはたつてきおさまふくよあまいとて
あくまかうあく乃ためよ備後を用ひる也
一三書よかほくをするもあ人ことよかつて
よてさへあまの何なりともとらたふ事一是
ちかきあるひるなるわかつていゆうきんの
ふつて本也まゆへい一書よ神代のまゝめと

うけ二書なりあくまかうあく乃備後を引三
高まはか積よ國おさまり天下泰平の時はい
とくをゆうきんなりうりゆうへよ三書なり
幽玄乃さこむ幽玄いろくあり男の幽玄も
ありさましく乃幽玄ありとひんを女のふよ
さこむる事一二番の備後おとこのふあまの
陰陽和合とある世三番よりつてなるわらわ
うん世おさまり泰平の時代よはいろよそ見
くふあて幽玄所もわてきんか乃見ちよなる
ゆへなるうりゆうへい一書よ積よまあひ
ころものあまのきんかゆうきん乃かつて
するなり

一四書は鬼終を定むるも是も鬼を定むるとして
くく乃鬼のあはれいとの鬼を申とて
も子細いはずへの終ゆるきん乃かつて也腸
のあはれ祇をまらひ二番は悪魔かうあくの
脩羅わくのしとく代を治めて業花はもつて
ゆるきんはあはれときい又めいとのとらへ
ゆくなわくく乃とくたのてをきちめ業
花さかんもあはれ人君の一期の一期の
ゆめ電光石火の火まかりのあひさ此
世を定むたのみもたのまきと只菩提心乃
心をたうは世は祇りりんる本意なわ然は
よけてくくいあはれともあはれを定むる浮世

あまの因果むくひのめいとものまらへて
たのて業花も菩提乃たよわはあは
さるとのらをきんとの候はもつて
四書りめいと鬼とゆるなわまこい
屋くあつてもすきなまに四りんめ時分
法人も祇あはれはまらひ一万人乃祇あ
はれもさま一氣をもゆるきん乃一燈乃うち
くくもつて鬼をもちゆる也こそ終組乃
秘す也かくのしとくたもろきあはひのら
もものちれ世の祇をばせめくゆるく
とらへひつてくく乃衆はくあはれ
うく祇をまらへ世を定むひかへん

人乃發心をおくく人の佛法ものありあり
後法乃場よまいつるも同おなわさふよはして
くくひを無尽経とりよもはばばなわ

一五番は義理とささむる事世る仁義礼智
信のふきををむくくしてきりや本とする
本意なわ右一番は神のふとささめ二番は
備後とさため三番はかほくをさため四番は
鬼と定むめいとのも様をあらうひる義理を
あらうひるふきりよはまきころものいやくの
しくなわゆくとのことりりもきりや神も
つんりたれ也志ううよはしてふ番は義理を
ささむる也

一六番り一祝言をまじするもくく一慶の
おさめあまのきをいふ井戸をいふ井戸をい
ふ井花いふらふきつとともまきころあへり
喜きねまいつきり一喜のことくよはあさき
さうあはとうまを表さきりへりぬる春は
又あまとたのくはいたわおさひておさめ
六番よく一めはけの祝言をまじする也

右如は一日乃のふりありとありへは
世る乃も様をまじくあはりり一百万
くくを見する能きまじあまとして智慧
あきものこくやう乃も志んや能組乃
あはし如はさわりあはくく初日乃のあ

一 舞の曲は二日月より又く人々をもく
 かしひかしくかしくなるとを入るるありある
 へまは目此終子似る終はせぬなり
 一 舞の曲は是よりありはこま申樂の奥に
 秘するなりひらつをこまよきいまりころ儀也
 こまをたうろき子あともおちし終るより
 おころ儀あまいこまをとめさこまよきこ
 七日乃志やうきくいうわめよもい
 さん志しふとあまははくふへん
 一 樂拍子の舞は緊那羅王竹之洞也葉の志の舞
 終ひ也佛の大樹緊那羅とときまませ
 時のるなり大衆舞とつふなり

一 男舞の世親菩薩の作りたまへは俱舎論の
 俱舎此まいのなり
 一 舞の上界は月宮月乃みや人まひたまへは
 霓裳羽衣の曲なり唐土よりい玄宗皇帝毎夜
 月宮より昇りくくわて楊貴妃よをへ終ひ
 なるなり
 一 鬼の乃舞は流砂は除砂大日と伯太王舞乃
 なるなり
 一 終の曲は天照太神のあま乃岩戸のうらよ
 終居志終ひ引かる上八百万法神も終終ふ
 曲終なる備馬樂やか持あんとなり
 一式三番の大きを信は認終ふ秘曲也

一翁の太夫ハ天照太神宮也

一千歳歴ハ春日大明神也

一三葛申稚久ハ神ノ一大明神也

右ハ三葛法花經乃席分正宗分流通分の

三體也

一皮くくく叱囉哩くくく囉

叱囉哩囉稚唎囉く唎敷く

一底哩耶叱囉哩叱囉哩囉

叱囉哩囉稚唎囉く哩敷く

取千代まで所産我身も秋作

露と雫との齡より幸祐意は似くわ

とふくたふくたふくくくわらくくふとふ

ちりやたふくくくくくわらくくふとふ

徳省耶頌く耶比盧婆賀唎く頌く耶

座くく居たふくと参蓮花利耶頌く耶

千磐破神の彦佐此久志くくとは祝

警破く理智耶以上

凡法千年乃鵠ハ万歳樂とくくくわ

又万代乃池の雫ハ甲子三玉を備くくわ

清の沙汎くと散て鈴乃白乃色勝く志

流の冬冷くと落萩の月鮮は浮くくわ

天下泰平國土安穩のと目乃清祈禱なわ

ありくくや耶何雨の翁ち

あまは何雨の翁ちうや何の翁ちそよや

千秋万歳乃祝乃舞を道に一まいまたふ万歳
樂こころ清悦耶

清歌ハ何事小官者後釋迦牟尼佛此小官者后
父をい浄飯大王と白母ハ是摩耶婦人善学長
者乃娘也生取ハ功利天一雨ハ花園内座内也
父乃尉親子と墨も内祈禱中さん又もや東院
官去一天風を収て民不湖乃樂傍玉神恙不侍
座一々麟角無傾天地開闢して三皇又帝の后
昔傳來は翁うも屋祝と松をい根あううう
これ阿哩字數こく以上うあき大うなり

一國考古事小白枝摺と柄紙くは初嘗婆母山小
日朶叔自在嵐も寒之習人もあくと祿志所座

せし小天来下と雜こののをまう一慰是を
曲樂としふなりは天人乃書せば能を深山此
物多し是を真似こまひり三座の申樂なり
月吉としりふ一座まう業曲一座まう階一座
以上三座也

一大和四座ハ申樂と云うわ

を江さうかくなをい猿と云字を書うり
日吉の志くや猿なりゆへよばをううと也

大和申樂の次第なり

- 一才二天照太神 翁舞 走ぬ 后
- 一才一八幡大菩薩 千歳 珍大夫后
- 一才三春日大御神 三番舞 樂太夫后

さき進い春日と名のり三千人の宮人乃社あり
りしりくく頭のまね一層守久祓本比釋迦
如來なり春日殿子七百三千人乃舞のりしり
たりこま進坂もつて日本國子舞童とて呪くあり
次申樂を春日の祓乃内もわたりた旦も時清子乃
舞た旦三番目りしりさめたまふ子より三番
さあうくとかうも祓本の大おとけり此以來
秦川橋安氏の代より申承と云名をうきまけ
四座とりうも春日乃四所明祓一人はく乃
清もまなり一番大菩薩二番天照太祓三番子
妻白大祓祓まゝ若宮の守久祓乃内りしりなり
守久祓い三人の父母の清祓也若宮をまか依

内祓といへりこま進い天照太祓宮八幡大菩薩
春日大祓祓のたうせ給ふ父母祓志うきん此
面とうが子あて天長比久乃きたうくわ志き
さんりんあけりももく譯面あるへき大り
なりたろくふねいも内りしりとかうむる也
さてわきのふい妻白乃の祓の内もわり乃事
なり天竺ももさるみことりありありこま進も
まゝき乃守久の祓天照太祓宮の清もまゝり
も及わき終の次才あけて是いもきわりかど
かめたりしりゆくのふと云なり
一たう乃ら子此小祓といひ進よちやくおと
よりとてわ上条下条よりととななり

一さうわ松乃小鼓乃奉大鳥針のさより笛を
ひいとあくこととさき白吉とつふ字をわ小鼓
とつとくと三を打す九曜乃星をひようど
ちよもつて大のといぬるんつひとも小鼓の
いとめをまうくぬるすや一はうことほろれ
子細なり又中をうとあきううをくろくぬり
うらとつとつとつとつとつとつとつとつと
吹やりてや一とつとつとつとつとつとつと
星とよめり天よりは松さよりりころ時さうひ
こさほひろ二人くとりて々ふひり一とあを
きてよつとつとつとつとつとつとつとつと
枝よさうとつとつとつとつとつとつとつと

されい松の下よてういおきほく見のり天長
地久清新喚海とかやうほうつ口傳あり笛も
かくおしとくのもあり毒うきかして一は傳り
祝言よはよとさうとつとつとつとつとつと
あくなわ十一月二十七日をわ同二十八日よ
馬場よて四座乃とちありひあり弓矢のうとひ
なり親世かうさうい船乃とちありひ也さきい
能子出く拍子乃位これ二の乃位をひひり
もちん奉あうひなりとつとつとつとつと
打よびさうわ松乃いをまらふさきいほ松の
天より天照太神宮を此いとあもつてつり
孫入りりうりゆ人は笛小鼓天長とは皮神の

清名をとりこときりみうき山ゆとい木もあく
梨山をとり時かの松いあきりもは神衣清宇
二重二月六日よ河内國ひらたうより春日大
明神いみりさやまんとひうほくせ給ふうれ
うきいぬもつて二月六日より本をうへい
はうきいりよほりてなきこの所まつりあり
則二月六日よ四座のときとの崩猿渾のまん
みくほとめりなわ芝のうんなわ同七日より
き合あり芝と舞臺とさめめのおとする事
子細あり春日をいこ石をおすとのと
いまは六の神三千七百人乃神りうらなわ
是を寸しとのとりり右よりきをくことと

こきいま白大明神乃所守の神なりいまうれ
あと人君よわくしてかくのしととなわり同
所守の神守久神とてま白よまますり乃
清たとく二番よまぬとの舞とりみてとよ
ま白りあり三十六人の社家けりうらなわ
是の二月六日よ春日の清あみく舞あり六人
ほくもく舞ありかくれもや一きひちりき
聖賢聖あり是をもつてまつりことぬおむ
まこ寸しりよと云事あり志とらう人と
式三番さけうくあきとまきとら乃刻よぬくは
猿渾の池乃う人を三番らふるも才三番よ
たところるあくとてまぬは舞のほよのふ

ありさうんさふかくと云申来こま也日より
 きふたわかくと云字をうこときり三人の
 兄弟乃流きあるよふ所てとよ和國よおいて
 す一舞申樂と傳りまこあふとさふわくたを
 猿系とこれ字をりあも子初い日吉の志とや
 ころふりてひゑのふより猿樂とつふ字を
 かくのこくよ虫ころをはさふわくい日吉乃
 祿を所とむりりよりかくのことき乃儀
 たり熱して申樂とあらんものいこれんちと
 いこつこよあきは春日乃清らけをわうむる
 ありめても猶大事と思ひ徳藝を心作る
 たえぬやうよせいを入らて考白の内内院よ

かたふたわ

一夫式三番座付乃次才乃事

- 才二 扇
- 才一 千歳
- 才三 三番
- 才四 笛
- 才五 小鼓
- 才六 大鼓
- 才七 太鼓
- 才八 篠衆
- 才九 狂言

一まくなあき千歳二ふるさうわいのけいふとき大夫
おへーも次子右乃しとくしと建もおへー桐扇
きんさいも唐付の習志てりーら乃きまより
らー一さいよひとあうひよ者しけくとう
さてせんさいいれいおまんあうまて面粉を
目八分よりまんてもちてりーこまるおきか
せんさい乃右乃しとくしと建も唐付も時
神をあうくとむしをもちれををばきく千歳
面粉をおきか此まへよもちてゆくたきかの
まへよ面粉ときそひかをときたまか面の
とりいーめんさうれあこよすたゆあ乃
うへむきてをくしとあうりりき乃唐りー

おをばさんちさうい志てをーら乃わこりー
おをらうれ時し建も唐よけく志てりーら此
きまより唐付前正面へ一礼あり梅をのく
ら唐付らてよりふえやうて唐付きをあく
小けいこうちけく見おけ乃ひかをときけをを
とりいーもとのしとくしとをーてた乃
うらよりよりてりーとけをわう乃そてば
ひこうよりぬきつとをひこうわよもちあさよ
乃せふえ乃ひーくをもちおけくみおりこも
おきか唐しとわなまともとりよ時ちありり
けいこうちのまんりてひろきさわああり
さてきまへく乃祝え乃うひおきあのみい

あわつてのこゝろ舞おさめてあゝいのみん中
あゝ像而礼をしてさそふちありわいのうも
志清くふかく屋へつりたきたれ舞れうちよ
む乃眩とりよ事ありこをたかまきよあゝい
あり秘事

一せんさいのまいありいだきのうつとういひ
ひつりより左右のんうちをとわしく見打の
そとより舞臺のなうんつてたえはとよこわ
つひりーとあそりとしひて志さけ拍子あり
こらといふしてあふきよ目と付送よまけら
さそあふきをさーあききうのちとせをうん
るいあまらなせとめの眼るもよりんせい

あゝませいなふらうへ巻やせむなわらう
とふくくくとしあ時あー拍子三つあり舞
たまあつひのこゝろは舞つて打のまんよそ
けいこ寺のこゝへむき又ひたりへあふき茂
とり舞とむらあト拍子ありさそと乃座よ
なをら

一さんささう大けくこもみおーうちつてき
あたらせよきうろよこちありわ橋あゝりあゝ
さんささうのまいときせんさい珍をとわ
いーさんさよもんだうあゝあつてすくを
わんささんは珍とつてあゝひ中がとん出

さわりてあきも鈴もあはれ是も五取拍子
ありさしてつゆ乃こもくまふれをひく乃まふ
まてあし拍子こまふふと三交まふらこひ
ことうかをとあけの事子ああひるなわまい
とめて面をぬきやうてかく屋へあへる
一おきかふふ乃吹やうのり度つき三所あり
初日真二日の草三日の竹四日のひりき計
あわ但舞の笛初日のしくくより入る度付
吹てひりききき此ゆりをあくとあくとた
まとうひひひひひひひひひひひひひひひひ
くちとよくくちよき喜のゆりあり梅これ
所き此舞の位までせんさいうこひ乃まふよ

ひりきありあはれはのあとうひひてははら
りりうをうけてき喜よりゆりけの笛せん
さら一めらり正面りむりひ君乃ちとせを
らん事いとくひひひひひひひひひひひひ
らりうとふくくくくくくくくくくくくくく
あわこまこまの舞よりあひりきあり
さく翁座しそなたまともまひくくくくくひ
こちありわん時笛のあひ此あきああり
ひりりりりりりりりりりりりりりりりり
まひあありと日れ所きたうなわこまよりも
吹やうありうやうけくのたきあたとくひ
一めらりの舞ありこもあふふ六下を吹

うふよやとうしひ舞あひ笛あき横あひさそ
翁うんはも見か一乃笛ひ一きそ小はくこ寺
いこさる音乃ゆりなあくまこひく事一も
ありも見出ー乃うちのもなわきんささうの
位こふ忌けいこよあり京あしりい子細きて
寸一志列うなわ

一 小鼓打しーのる初白の拍りもわうちおと
二 目きさこより打おと三日うーらよりうち
おと四日こらとわくはやくしてなうい渡乃
水とりよはくこの水いせんさいのこあなわ
おきあのうこひんときき志つうふうちてよ
地うこひんときいかろく喜をもつすくうい

一 せんさいふあるい渡乃あの時まへり
こいとうちあきてしひおとさきなわこい
とくあ二交也は乃こい替る舞のあ也そは
うちあはれきあふうー二のけくうはて
あきまきいまきんとそあへて志つむの座
してぬたきともまいいら乃ときれたこあひの
こいこふこつこちわうくとう作事一こ
きたうれこらなわと日の清りきたう乃時
きさみあくゆそよやの時舞なり二三三
ませあをせでかーらまへるの神をあへーそ
うーをすてこきさむ舞もて乃時ふよ本の
打てかーらうはせうまもあへい二三

けくろち舞あーろあへきさなり翁のあしひい
うー志流くふ三き乃舞とらたへきさなりのお
ふふこけいこ三つろの口傳まへきり又さーき
あて舞ふちあーろーろ二度あて打つこと
こ道有む終乃あしひなり又屋し急のまうち
うーい花やうふ急をうけまこ太夫徳を
うひおもとときいひきくいつらまも志んよ口傳
一式三番乃打出ー回勅進れうちおの敷乃す

初日 〇のながかか 〇のりーろ
二日 〇ち 〇のりーろ
三日 〇のりーろ 〇のりーろ
四日 〇のりーろ 〇のりーろ

りふけくろのあしひいせんさいふりうけろろ
かろのしとくろーろちわくはなれたゆふれ
身かまへをえあんきせたらーるおきふれ舞
すきろつゝ大夫かくやへ入る時ろーあろり
半ちろろわ入る時けくもをくへーははい
ちろひろーろ此時小鼓ろーろちろろろろ
大けくろ打いたろーちろひのりーろろろろ
はしとく心けろちおとへし
一舞初てのちろろととのとちろひろーろ此
まへおきをまくや入るちろろのなりさん
大けくころろろろろろろろろろろろろろ
二のりーろあろこ道子御あろ玲乃喧五腔同

よわわろ一翁うち大形かくのし〜一、こまや
うたうらむい葉子及び〜口傳

以上三十七ヶ条は巻よりきあ〜り
あ乃条〜い終乃〜まゆを翁ち大形
うけ終りけ〜んを通うき〜るこれ
まきよけは終るをもら〜と〜きる
き〜しあき時〜いき〜も免あ〜り
事〜るあ〜るなり無所法よあさこ
これ〜いゆら〜をう〜むる也たきあ
地〜は花經た〜よあんをもらて作り
終るをま〜〜なわ

一 大ま〜して〜ありむ〜一 標花傳書と
あつ〜るよろけは世界よありとあ〜い
もの〜中よ花よま〜〜れも〜ろく見と
あるものいあ〜又多〜これたも〜ろきあさひ
曲よは終よ〜〜るすいあ〜志うきい終を
を〜へあ〜ひ大事〜をけ〜ある取いもあを
傳るなわと〜花傳書と〜をうい〜わ終の
極意〜此傳書よ終海事〜いあ〜ゆ〜く秘書
と〜〜りり〜めよ〜〜いあ〜ひあさく
なわて花傳書いかう〜なわら也い〜も
大ま〜〜家を継子ゆり外人よみ〜る事
かう〜大ま〜秘書するあを以の〜なわ



